

眼前に広がるのは 七峰を望む絶景のパノラマ



出典：祁答院郷土誌

蘭牟田の山と池のはなし

蘭牟田池をとり巻く山々には次のような一連の伝説がある。

一 飯盛山

そのむかし、蘭牟田に男竜・女竜の二人の神様が仲よく暮らしていた。山紫水明四季それぞれに花はほころび、快い小鳥の囀りを聞きながらの平和な日々であった。

しかし、やがて男神は二人だけの生活に飽き、嵐の激しい一夜こっそり池を抜け出し行方知れずになってしまった。残された女神は男神の裏切りに気付かず、そのうち帰ってくるものとばかり信じ、男神のための陰膳を備えてその無事を祈りつづけた。

捨てた陰膳の飯が一年、十年、百年と積み重なってやがて大きな山となった。この飯盛り山をのちに飯盛山というようになったという。

二 愛宕の原生林

月日はむなしく過ぎ、何年たっても男神は帰らない。そのうち風の便りに、男神は霧島の大浪の池で他の女神たちと一緒に暮らしていることがわかった。

淋しさと恋しさに堪えかねた女神

四 竜石

こうして、幾百年、幾千年と時は過ぎたが、女神はどうしても男神を諦めることができず、悶々の日々を重ねていた。

池水に写る自分の姿はいつにも変わらず若々しく美しいけれども、一旦竜の姿に返ってみるとさすがに年老い、髪は真白、背には苔や水草が生えて見る影もない。このような姿を里人に見られることを恐れた女神は、霧の深い夜を待ち続けた。霧のもうもうとたちこめた夜、女神は「今度こそ必ず天に上り大浪の池に辿り着かずにおくものか」と決意し、竜の姿に戻って場所をかえ西側の低い山をソロソロりと登っていった。

丁度頂上に登り着いた途端に、どうしたかたちかたちこめていた霧が俄に晴れ、差し込む朝の薄明かりにみにくい巨大な竜の姿が現われた。たまたま鴨取りに来た里人がこれを見て「あつ竜だ、竜だ」と叫ぶ声に驚いた女神は、今はこれまでと無念の涙をのみながら忽ち岩の姿に変わってしまったという。

池の西側、山の頂上から中腹にかけて並び聳える大岩がこれであって、人びとはこれを竜石と呼んでいる。

は、どうかして男神を連れ戻そうと思った。

しかし、竜神が旅をするにはもとの巨大な竜の姿にかえって雲に乗って行かねばならない。女神は雲のあたる夜毎に、竜の姿にかえって天に上ろうとしたが、一向に雲に手が届かず、いたずらに滑っては山の斜面を崩すばかりであった。

ついに長い年月の間に、山頂から中腹にかけて大きな谷間ができたのである。

この山を愛宕山という。のちの人びとはここを馬の放牧場として毎年春先に山焼きをしたが、不思議にこの谷間には火が燃え移ることもなく、原生林となって今も残っている。

三 住吉池とのつながり

山から天に上ることを諦めた女神は、地中を潜って大浪の池に行くことに決め、何十年もかかって穴を掘り進み、ついにある池に頭を出すことができた。しかしこの池は蒲生の住吉池であって、霧島は遙かに遠いことがわかり、女神は地中を行くことを諦めてしまったという。

のちの人びとは、蘭牟田池の蘭草取りがあると、必ず住吉池が濁り蘭の根が浮かんでくるといって、二つの池は地中で連なっていると信じていた。

竜石の話をかいつまんで言っても、浮気をした男竜を忘れることができないう女竜が、男竜の居場所を突き止め、連れ戻しに行こうとした道の途中で、急に晴れた霧のせいで人間にその姿を見られたため、竜としての神通力を失い、無念の涙をのみながら岩の姿に変わってしまったというもの。

また、竜石伝説の看板では、その続きの話を読むこともできます。

